

都立中央図書館の 在り方を考える 有識者会議 (第2回)

令和5年8月29日



回	日程	内容案
第1回	7月27日(木)	○都立中央図書館の概要、現在の取組 ○新たな図書館に必要な視点
第2回	8月29日(火)	○新たな図書館に必要な視点 ○担うべき機能・役割
第3回	9月21日(木)	○担うべき機能・役割、コンセプト ○機能を発揮するための工夫（環境など）
第4回	10月上旬	○有識者会議のまとめ （新たな図書館の機能・役割、コンセプト）

会議資料

- 1 前回の主な御意見（これからの中央図書館を考える視点）
- 2 これからの中央図書館が担うべき機能
- 3 アクセシビリティを考慮した事例
- 4 デジタル技術を活用した体験型メニューの事例
- 5 中央図書館と団体等の連携

1 前回の主な御意見（これからの都立中央図書館を考える視点について）

【図書館の意義】

- 図書館の利用者は必ずしも享受者というだけではなくて、「東京の作り手」になる。図書館を媒介とした地域づくりへの貢献がいかにあるか。
- 図書館利用者のターゲットや利用者の利用目的を明確にしておいた方がよい。

【リアルな図書館の必要性】

- 図書館の利用方法がリアルとサイバーに分かれてくる中で、なぜリアルな図書館が必要なのかを改めて考えるとよい。
- サイバーワールドにどうアクセスするかを学ぶ場所として、図書館という物理的な場所も重要。リアル(オンライン)で人と人が直接会って学ぶサービスの提供は非常に重要
- デジタル化の流れの中でフィジカルな図書館の意義を考える必要がある。自然、豊富な資料や東京都・江戸の資料といった軸を定めて注力し、軸に沿った体験や施設の特徴が必要
- 次世代の技術でフィジカルとサイバーをミックスするような体験ができるメニューの充実も必要ではないか。
- 情報との出会い方を工夫して、障害のある方、教育機会に恵まれなかった方にも、ここでしか体験できないフィジカルな体験として、気軽に情報に触れることができるようにしたい。
- 図書館にカフェ・コモンズなど多機能化の流れがあるが、どういう多機能化、機能の相互関係がいいのか。
- 国立国会図書館がデジタルの個人への配信を進めている中で、デジタル面での役割分担をどうするか。
- ライブラリーとミュージアムがデジタル化を進め近接する中でコラボレーションが重要

1 前回の主な御意見②

【デジタル技術】

- 建築と情報系では時間軸が異なる。情報系の世代交代はせいぜい5年
- 10年後にどのようなシステムをいれるかということは今考えるのではなく、最先端を取り入れる枠組みの設計をしておくことが重要（設備、人材、組織体制）

【インクルーシブ】

- 障害者に対する支援技術は、高齢化や多様化する一般利用者への利益にもなるというところのシナリオを議論することが重要
- 障害者への対応を一般の人にも広げていく在り方が重要

【観光】

- 現在の東京がわかる施設として、インバウンド観光客向けのホテルのコンシェルジュのような機能があるとよい。
- ここに来たら東京のカルチャー・暮らしがわかる東京博物館的な機能があるとよいのではないか。
- 観光の視点をもつなら、建物を魅力的にすることや、行くこと自体が面白いなど、フィジカルな場所に行くこと自体に意味を持たせる必要がある。
- 建築にインパクトがあると観光客が建物を見にくる。
- その場所だけでアクセスできるコンテンツがあると良い（kindleで買わないと読めないようなものとか）。

1 前回の主な御意見③

【都市課題】

- 東京や日本が抱えている問題は先進的な課題。それらに前向きに向き合える知性が東京にあることが希望になる。
- 世界的課題として人間とは何かということがある。人間について考え続けることが科学技術の価値・意味への理解につながる。人間の在り方が裏テーマにあってほしい。
- フォーラム、イベント、ワークショップ等、六本木アカデミーヒルズが参考になるのでは

【施設】

- 保守的にならず晴れやかないい建築を作ってほしい。
- 段差をなくすとかエレベーターを作るとか、建物の物理的なアクセシビリティだけではなくて、ロボット技術やセンサー技術、AI技術を導入してスマートビルディングといったところにも広げて考えるべき。
- 東京の緑や自然地形をどう生かしていくか。町と緑と図書館の空間的な関係をどう生かしていくか。
- 都民が図書館を見出すアプローチとして、自分自身で図書館を発見するのか、図書館へいざなう動線をあえてつくるのか、二つの方法がある。
- ライブラリーメーカースペースの設置が世界的な流れ。3Dプリンターなどを置いて使い方を学んでもらう。課題は文系の司書が多く足踏みしてしまうこと。大学生、アルバイト・ボランティアを活用できないか
- 日本では新しい機能やサービスは子ども向けが多いが、広く市民が利用できる施設が良い
- わいわいできるようなスペースがあると面白いのでは。
- ライブラリーキュレーション（図書館の本の分類）によるセレンディピティ（偶然の出会い）が創発性を担保する。開架を維持又は拡大することが重要

2. これからの中央図書館が担うべき機能（前回の御意見等を参考）

（1）検討内容

- リアルな図書館の存在意義
- リアルな図書館における多機能化（誰を対象にどのようなサービスを提供するか）、デジタル図書館の在り方

（2）リアルな図書館の存在意義

- 行くこと自体の意義
 - 観光（建物自体の魅力、東京博物館、ホテルのコンシェルジュ機能）
 - くつろぎの空間
- 体験することによる意義
 - reading disabilityの支援技術を活用し、多くの人が読書を体験
 - 東京や日本が抱える先進的な課題に前向きに向き合う知性の触れ合い
 - フィジカルとサイバーをミックスするような体感のメニュー

※中央図書館の特徴である江戸・東京関係資料、都市問題などの情報を活かすことも考えられる

(3) 新たな機能に関するアイデア

項目	これまでの図書館	新しい図書館（追加される部分）
来館者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査研究を目的とした個人等 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供や障害者を含め多様な個人が利用 ・ 国内外からの観光客
基本的サービス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多彩な資料の収蔵、保全 ・ 利用者の課題解決のためのレファレンスサービス 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 技術習得、創造・発信の場 <ul style="list-style-type: none"> ➢ ラボの設置、講演会等の開催、体験型展示 ➢ 他機関（博物館等）との共有・連携 ・ 市民による課題解決の活動を促進 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 都市課題を扱うエリア、シンポジウムの開催等 ・ 江戸・東京の情報集積と展示
インクルーシブ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚障害者を想定したサービス ・ 多数言語を中心に多言語化対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者、こども、視覚以外の障害者を含め全ての人のアクセシビリティを確保 ・ 少数言語も含めあらゆる言語の壁を克服
デジタル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料の長期保存やHPでの公開を目的にデジタル化を推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・ デジタル技術活用によるインクルーシブの実現 ・ 体験型展示への活用 ・ デジタル空間としての図書館
施設	<ul style="list-style-type: none"> ・ 豊富な資料の収蔵スペース ・ 閲覧、複写サービスの提供 ・ 公園の自然を感じられる立地 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 魅力的な建築 ・ くつろぎの場（自然環境の活用） ・ センサーやロボット技術等、時々々の最新技術・設備を柔軟に受け入れる施設 ・ セレンディピティを促す空間

3. アクセシビリティを考慮した事例 ①

【ロボットによる自閉症の子供たちへの支援】

サンタアナ公共図書館（アメリカ 南カリフォルニア）

- 自閉症の子供たちを教育するために特別にプログラムされたロボットを図書館に設置
- ロボットは、子どもたちが周囲の世界とコミュニケーションすることを助ける。感情がある人間と違いロボットは批判的にならず、常に支援が可能



出典：CBS NEWS HP

3. アクセシビリティを考慮した事例②

【AI搭載視覚支援ウェアラブルデバイス(スマートグラス)による読書サポート】

岐阜県立図書館、豊島区立中央図書館ひかり文庫※

- メガネに装着し、本体を軽くタッチしたり、読みたい文章を指したりするだけで、活字を音声で読み上げることが可能
- 点字図書や音訳（朗読）図書に比べ、遥かに少ない時間と投資で読書環境整備が可能
- 将来的には読書環境に留まらず、AI搭載のスマートグラスによりユーザーに周辺環境の情報を伝えることが可能になることが予想される



出典：岐阜県図書館公式HP

※豊島区立中央図書館ひかり文庫では、2019年に試験導入

3. アクセシビリティを考慮した事例 ③

【案内ロボット】

- 巡回しているロボットに行きたい場所や探している場所などを音声で尋ねると、最適なルートを探して案内してくれる
- 病院では該当の診療科に、ショッピングセンターでは該当の売り場に案内してもらえる
- 工場見学では自動音声で工場の各施設を案内して、質問に回答する事例あり
- 新たな図書館体験として、検索結果から、ロボットが書架まで案内してくれるサービスが実現している
(大阪府泉大津市立図書館)



出典：PR TIMES



出典：HCI公式HP

3. アクセシビリティを考慮した事例 ④

【北欧図書館でのバリアフリー対応】

- 視覚障害者向け位置情報アプリ（BlindSquare）によって、来館者が図書館内のトイレなどの位置情報を音声ナビゲーションで取得可能
- 車いすに乗ったままでも資料に手が届くように書架の高さを低く設定
- 車いすでの移動に支障がないよう、書架の間の通路を広く設定し、柱や壁を極力排除



4. デジタル技術を活用した体験型メニューの事例



出典：慶應義塾ミュージアム・コモンズYouTube動画

くずし字OCR (AIくずし字認識) (上)

資料にOCRソフトの入ったタブレットをかざすとテキストが浮かび上がり、初心者でも古典籍を読み取ることができる。

ブックリウム (石川県立図書館) (右)

本の集まりを宇宙に見立てたデジタルアートを展示。好きな言葉を選ぶと、関連する本がプラネタリウムの星々のように浮かび上がる



出典：the Exploratorium公式HP

グレートアニマルオーケストラ (エクスペラトリウム) (上)

動物たちの生態音響を没入型のオーディオビジュアルで実現したグレートアニマルオーケストラ



出典：石川県立図書館公式HP

5. 中央図書館と団体等の連携（現状）

▶ 起業・創業相談会等ビジネスイベントの開催

- * R1年度まで東京開業ワンストップセンターと連携しセミナーを開催したほか、日本政策金融公庫と連携し創業相談イベントを実施
- * R5年度は日本政策金融公庫と連携し、高校生を対象としたビジネスアイデアの発想・実現に向けた講座「高校生ビジネスプラン・グランプリ ビジネスプラン作成講座」を実施

▶ 医療機関等との連携

- * 毎年、都立墨東病院の医療情報室で、癌に関する図書の展示（出張図書館）を実施
- * R5年度は、特定非営利法人 東京難病団体連絡協議会との連携展示を実施

▶ 江戸時代貴重資料（特別文庫資料）の美術館・博物館・文学館等への館外貸出

- * R4年度は、サントリー美術館、千葉市立郷土博物館、姫路文学館等へ貸出

▶ 近隣大使館と連携したイベントの実施

- * 大使館と連携し、所蔵資料と関連付けた展示やイベントを多面的に展開



エジプト大使館やJICAと連携した展示（例）